

令和五年度（二〇二三年度）第七十一回 北海道浜頓別高等学校卒業証書授与式 式辞

オホーツク海の流水を眺めながら、暖かな日差しを心待ちにしている私たちにとって、四季の中で一番待ち遠しい季節となりましたが、一足先に、ここ浜頓別の地において、希望と喜びの象徴である春の佳き日を迎えることとなりました。

ここに、北海道浜頓別高等学校第七十一回卒業証書授与式を挙行するに当たり、本校の教育活動に多大なるご支援をいただいております浜頓別町長 南尚敏様、保護者と教職員の会会長 山口亮様をはじめ、多くのご来賓のご臨席と保護者の皆様のご列席を賜り、厚くお礼申し上げます。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。三年間、時に喜び、時に心配しながら、温かく見守ってこられたことと思います。これまでのご労苦に敬意を表するとともに、本校の教育活動へのご理解とご協力に対し、高い壇上からではありますが感謝を申し上げます。

卒業生の皆さん、卒業おめでとう。三年間の努力と研鑽に対して、心から拍手を送ります。出立する節目にあたり、孔子の言行録『論語』を引きながらお話しします。

知之者不如好之者。好之者不如樂之者。〈雍也第六 18〉

之を知る者は之を好む者に如かず。之を好む者は之を楽しむ者に如かず。

あることについて知識があっても、それを好きだという人には及ばない。あることを好きだという人も、そのことを楽しんでいる人には及ばない、という意味です。つまり、楽しいと思っ

てやっている人が一番強い、ということです。孔子は、学びについて、「知る」「好む」「楽しむ」という三つの過程で表現しています。「知る」が単なる知識の獲得を意味するのに対し、「好む」は、自分から何かをしようという積極的な意志がはたらきます。その後の「せずにはいられない」という感情がはたらくのが「楽しむ」という段階でしょう。何に楽しみを感じるかは人それぞれですが、何であつても「之を楽しむ」ことが、何かをやりとげる原動力になります。

これから職業や学業に向き合う中で、「大変だ」「自分には向いていないのではないか」と感じることもあるかもしれません。そもそも無理にさせられていると感じている間は、どんなことも決して楽しくはなりません。まずは目の前の「やるべきこと」を整理しながら、物事の様々な面を見るよう心掛け、「好きになろう」「楽しもう」と意識することが必要ではないでしょうか。

其心三月不違仁。其餘則日月至焉而已矣。〈雍也第六 7〉

其の心三月仁に違はず。其の余は則ち日に月に至るのみ。

孔子は、他者に対する思いやりの情愛である『仁』を最大の徳としており、仁の徳を心に上手く定着させることが出来れば、それ以外の徳も自然に身についてくると考えていました。そのため、優れた十人の弟子の中でも特に有望と見込んでいた顔回に、まずは三ヶ月の間、心が仁徳から離れないようにせよと教えたのです。

三日なら何とか続けることができるかもしれませんが、三ヶ月間続けるとなるとどうでしょうか。孔子の生きた時代に比べて、倍以上長く生きている現代人には、半年程度の感覚になるでしょう。先ほど、「知る」「好む」「楽しむ」という三つの過程の話をしましたが、何事も「楽しむ」に至るまでには我慢も必要でしょう。それを乗り越え、ある程度の期間、志を変えることがなければ本物になる、ということです。

譬如爲山、未成一簣、止吾止也、譬如平地、雖覆一簣、進吾往也。

〈子罕第九 18〉

譬へば山を為るがごとし。未だ一簣を成さずして、止むは吾が止むなり。

譬へば地を平かにするがごとし。一簣を覆すと雖も、進むは吾が往くなり。

修行というものは、たとえば山を築くようなものである。あと一かごの土を盛るのを自分の意志で止めてしまうこともできる。地を平らにするようなものだとも言える。一かごでもそこに土を撒いたら、それは自分の意志で進めたことになる。つまり、行動は、止めるのも始めるのも自分の責任ということなのです。

「一かごの土」とは、今で言うなら一輪車のネコで土を運んで盛る程度の作業になりますが、このたとえで孔子は何を言おうとしたのでしょうか。一人で行うのはなかなか大変な作業ですが、山を築くにも、地面を平らにするにも少な過ぎます。もう少しで完成というとき「あと一息」が頑張れなかったり、手をつけなければならぬことの「初めの一步」をなかなか踏み出せなかったりということです。

目標がなければ忍耐することもなく、当然成果ありません。人生に完成などありませんから、常に目標をもって成長するための努力と研鑽を続けてほしいと思います。

結びに、皆さんが健康で活躍することを祈るとともに、その限らない可能性を秘めた三十五名の背中を見送り、万感の思いを込めて式辞といたします。